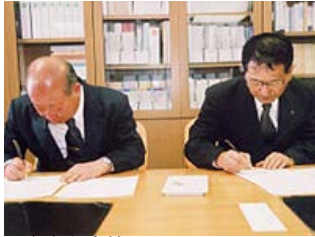
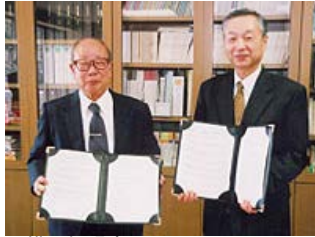


「高大連携」さらに推進

新たに県立高校3校と 相互の教育交流活発に



▲海老名高校との調印



▲横浜桜陽高との調印



▲百合丘高との調印

「社会知性の開発」を21世紀ビジョンに掲げる本学では知的財産を地域に還元させる一環として、昨年協定を結んだ県立川崎高校・生田東高校に加えて、新たに県立海老名・百合丘・横浜桜陽高校と高大連携の協定を締結。調印式は3月17日、生田キャンパスで行われた。

高校生が聴講出来る講義は全学部91講座(去年は69講座)。教員志望学生によるサポーター制度など、きめ細やかな受け入れ体制を整えている。その他の取り組みは次のとおり。

《大学セミナーの実施》

今年度の新たな取り組みで「大学ってどんなところ?」「大学で学ぶことの意義」「大学と高校の違い」などを説明し、高校生の進路選択に役立ててもらおう。

《キャリア・カウンセリング》

生田東高校では2年生に座談会形式のキャリア・カウンセリングを実施、進路にかかわる相談に乗っている。

《教育実習生・教科研修生の派遣》

県立川崎高校・横浜桜陽高校へは教員志望の学生を「教科研修生」として派遣、「教職課程版インターンシップ」を行う。

【ニュース専修4月号10面】

教科研修生体験記

県立川崎高で「教職課程のインターンシップ」ともいうべき「教科研修生」として、さまざまな教育活動に昨年11月から本年3月まで週1回参加した3人から体験記が寄せられた。

- 「手助け」から多くを学ぶ 奈良久美子(ネット情報4)
- 定時制で「日本語」教えた 工藤温子(文4)
- 率先し「声かけ」心がける 中島悦子(ネット情報4)

【ニュース専修4月号10面】

教科研修生体験記

「手助け」から多くを学ぶ 奈良久美子(ネット情報4)



▲「夢、目標はなぜ必要なの？」とプレゼンする
奈良さん

りました。しかし、最後まで積極的に生徒に絡めなかったことは反省点として残っています。

私と中島さんは生徒のサポート役として授業に参加しました。具体的には「生徒が分からない部分の手助けをする」ということが主な仕事で、生徒と接することから多くのことを学ぶことが出来、とても充実した日々でした。

最初は生徒にどう接していいのかが、何を話したらいいのかが、本当に分からず、戸惑っていたのですが、先生方がサポートしてくださり、なんとか話し掛けることが出来るようになりました。

今後はこの反省を生かし、もっと話しかけやすい、素敵な先生になれるように頑張りたいです。大学の授業では学べない現場の空気・雰囲気学ぶことが出来たことは本当に貴重な経験でした。こうした機会を与えていただき感謝しています。

- 「手助け」から多くを学ぶ 奈良久美子(ネット情報4)
- 定時制で「日本語」教えた 工藤温子(文4)
- 率先し「声かけ」心がける 中島悦子(ネット情報4)
- 教科研修生体験記トップへ

【ニュース専修4月号10面】

教科研修生体験記

定時制で「日本語」を教えた 工藤 温子(文4)



▲日本語をていねいに教える工藤さん

生活の場だけでなく高校教育に必要な、つまり国語や社会や数学等を理解するレベルの日本語が求められます。「高校教育での日本語」は、今まで知っていた日本語教育と違ったものでした。

授業でお世話になった先生が「出来るだけ教壇に立ちましょう」と言って下さったので、思った以上に教壇に立つことが出来ましたが、まだ教育実習に行っていない私には何もかもが手探りで、緊張しました。生徒は、社会人を含む中国人2人と韓国人と日系ボリビア人の4人。皆さん、日本語はかなり上手で、楽しく授業を行うことが出来ました。

週1回というも連日の実習より精神的にも体力的にも余裕を持って出来たように思います。このような機会は私のような教職を志す学生には貴重な経験で、不安に思っていた教育実習が楽しみになりました。

お話をいただいた時には「私に出来るだろうか」と不安がありましたが、好奇心の方が勝り、「せっかく良い機会をいただいたのだから頑張ってみよう」と前向きな気持ちになりました。

私の専攻は日本語なので、日本語学校やボランティアの日本語教室の話は見たり、聞いたりはしていました。しかし、外国人に日本語を教える県立川崎高校での日本語教育は、

- 「手助け」から多くを学ぶ 奈良久美子(ネット情報4)
- 定時制で「日本語」教えた 工藤温子(文4)
- 率先し「声かけ」心がける 中島悦子(ネット情報4)
- 教科研修生体験記トップへ

【ニュース専修4月号10面】

教科研修生体験記

率先し「声かけ」心がける 中島悦子(ネット情報4)



▲「読書をして見識を深めよう」と中島さん

だれかに知らないことを説明すると、よく自分の未熟さに気づきます。

「先生」の立場であるという責任感からか、相手が高校生となるとなおさらでした。また、自信なさそうな言動では逆に困らせてしまいます。生徒に理解してもらうには、まず、私が勉強しなくてはならないと改めて実感した場です。

教科研修では、生徒と接する場は主に授業のみです。そこでコミュニケーションをとることは思っていた以上に難しく、質問されるまで待っていることが多くありました。でも、教室を回ってみると黙って悩んでいる子がいることに気づき、率先して声をかけるよう心がけました。

高校へ行くたびに反省ばかりしていますが、すべてが私にとってよい経験となりました。

- 「手助け」から多くを学ぶ 奈良久美子(ネット情報4)
- 定時制で「日本語」教えた 工藤温子(文4)
- 率先し「声かけ」心がける 中島悦子(ネット情報4)
- 教科研修生体験記トップへ

【ニュース専修4月号10面】

緑地帯

『新しい外国語をやってみよう!』

多くの方が、中学高校と英語を学習してきて、「もう外国語はたくさんだ!」と思っているかもしれませんが、大学では、これまでなかったさまざまな外国語も学ぶことが出来るのです。試験のために勉強するのではなく、自分のやりたいことを達成する手段としての外国語学習が可能になのです。

他の大学にはないと言っても良いほど充実した各種の留学制度・国際交流奨励制度があなたに目標を与えてくれるかもしれません。あるいは外国から来た留学生と本音で話し合うことが出来るというのも一つの楽しみでしょう。大学の外でも、アルバイト先で、隣で働いている人は留学生などということはよくあることです。

しかし外国語学習は、それだけでも十分効用が考えられます。例えば、初習の外国語というのは、どうしても字母や発音などの学習で、幼児のするようなことをしなければならぬのですが、これは逆に自分の若い部分を再発見するチャンスでもあります。

日本語や、これまで学習した言語にないような音を発音してみて、新しいことを学び(学ぶことが出来)身につける(ことが、まだ出来る!)というのは楽しいことではないでしょうか。大学が遊園地になってしまうのは困るのですが、でも専門の勉強以外でも自分のやりたいこと、したいこと、出来ることを見つけましょう。(学生部)

【ニュース専修4月号10面】